



会議レポート

日本デジタル・ ヒューマニティーズ学会 第7回年次大会 JADH2017 開催報告

—コラボレーションによるデータ作成—

デジタル・ヒューマニティーズとはなにか

2017年9月11日と12日に、同志社大学今出川キャンパス良心館（りょうしんかん）で日本デジタル・ヒューマニティーズ学会（Japanese Association for Digital Humanities, 以下 JADH）¹⁾ の第7回年次大会 JADH2017²⁾ が開催されました。

本稿は JADH2017 の開催報告ではありますが、デジタル・ヒューマニティーズとはなにか、そしてその活動はどのように行われてきたかについて最初にご紹介します。2012年に出版された Digital Humanities³⁾ によれば、デジタル・ヒューマニティーズとは、人文科学諸分野におけるコンピューティング（計量・数値計算・データ処理など）を接点とした研究・教育・出版のための学問と組織の在り方のことです。平たくいえば「デジタル技術を人文科学分野に応用した研究教育活動」です。日本国内にはデジタル・ヒューマニティーズに関連する活動が多く存在しております。しかし、誠に残念ながら、研究内容が国際的に発信されず日本国内にとどまってしまうものが多々あります。日本だけでなく、他国で実践されてきたデジタル・ヒューマニティーズについても同様の懸念があり、それらの活動を国際的に発信・共有する場として2005年にデジタル・ヒューマニティーズ国際学会連合 ADHO（Alliance of Digital Humanities Organization）⁴⁾ が形成されました。その後2012年7月に JADH は ADHO に正式加盟が認められ、2018年2月現在に至るまでこの国際学会連合だけでなくデジタル・ヒューマニティーズ研究を支えるアジアの重要拠点となっております。

2011年9月13日に大阪大学で記念すべき第1回年次大会 OSDH/JADH2011 が開催されて以来、JADH の年次大会は毎年9月に開催されてきました。第2回年次大会 JADH2012 からは開催の趣旨となるスローガンが掲げられるようになり（このときは "Inheriting Humanities（人文

学の継承）"), JADH2017 では "Creating Data through Collaboration（コラボレーションによるデータ作成）" のもとに開催されました。

JADH2017 は、従来どおり投稿論文はすべてシングルブラインド制の査読付き論文になり、発表形式は4つ用意されています：(1) 進行中のプロジェクトの紹介に適したショートペーパー（質疑時間を含めて15分以内の口頭発表）、(2) 新しい方法論やデジタルリソースに関する報告を目的としたロングペーパー（質疑時間を含めて20分以内の口頭発表）、(3) 進行中のプロジェクトの紹介や開発中のソフトウェアの実演デモなどを対話形式で行うポスター発表、(4) 共同テーマに基づき構成される3本の口頭発表または4～6名の発表者がデジタル・ヒューマニティーズの動向に関するトピックを討議するパネル（質疑時間を含めて90分のパネルセッション）です。この4つの発表形式は、親組織の ADHO が毎年夏に主催するデジタル・ヒューマニティーズ国際会議 Digital Humanities の形式に合わせたものです。

JADH2017 の査読を通過した発表は38本（内訳はショートペーパー9本、ロングペーパー12本、ポスター発表16本、パネル1本）でした。参加者は78名でした。

JADH2017

JADH2017 は2日間にわたって開催され、8つのセッション（ショートペーパーとロングペーパーが混ざった口頭発表が6セッション、ポスター発表が1セッション、パネルが1セッション）に加え、招待講演、特別セッションが行われました。東京大学本郷キャンパスで開催された JADH2016 やそれ以前の会議と同様に JADH2017 もシングルトラックで構成されました。

口頭発表セッション

口頭発表セッションは、文学作品や古典に対するテキスト分析、文字情報処理、画像や音楽などのデジタル・アーカイブの活用に関するもので構成されます。また、各国の古典を TEI/XML でマークアップする事例研究、セマンティック Web の生成に関する研究は安定して毎年行われており、深層学習を利用した文学研究も年々増加しています。一見すると、JADH の年次大会は本会の人文科学とコンピュータ研究会（CH 研究会）や人文科学とコンピュータシンポジウム（じんもんこん）とテーマが重複しているように見受けられます。たしかに CH 研究会やじんもんこんの参加メンバと一部重複しております。しかし、JADH の年次大会では上述のデジタル・ヒューマニティーズ（人文科学諸分野におけるコンピューティングを接点とした研究・教育・出版のための学問と組織の在り方）そのものの歴史・趨勢・意義をメタな視点から論じるものが一般の口頭発表の中で扱われてきた点に、CH 研究会やじんもんこんとの違いがあるように思います。



図-1 パネルセッションの様子

ポスター発表セッション

ポスター発表セッションでは、毎年恒例の進め方として、最初に各ポスターの発表者が発表スライドを用いた1分間のライトニングトークを行い、そのままコアタイムに移行して1時間程度の議論を繰り広げます。ポスター発表セッションの査読を通過した16本の分析対象も口頭発表と同様に多岐にわたります。デジタル・アーカイブの構築や活用に関する研究だけでも、中国の古典、日本の古典、仏典資料、その他文学作品、西洋音楽、日本音楽、コミック、ゲームなどが挙げられます。また、後述する招待講演者のDonald Sturgeon氏も研究教育活動の促進を目的としたデジタル図書館のAPI活用に関する研究を発表されました。

パネルセッション

パネルでは「変革するデータ：データ解析を取り入れることで異分野の垣根はどのように越えられるのか」という共同テーマのもとで3本の事例研究について発表が行われました(図-1)。ここでは紙面の都合上、扱われた対象のみを取り上げます。1本目は文学・ジェンダー研究・ビジュアルヒストリー・政治の横断について、2本目は言語学・文学・人類学の横断について、3本目は障がい者スポーツ解析のための大規模データベース構築について扱われました。

招待講演・特別セッション

1日目午後3つ目のセッションでは、ハーバード大学のDonald Sturgeon氏による‘Collaboration at scale: emerging infrastructures for digital scholarship’と題する招待講演が行われました(図-2)。講演では、Sturgeon氏の進行中のプロジェクトが例示されながらデジタル・ヒューマニティーズが近い将来までに達成すべき目標についてお話されました。歴史資料の公開・オープンソース化や図書館のデジタル化などの大型プロジェクトを通して(研究者に限らず)人々と学術分野の連携が促進され、インフラ整備によって、ますます人文科学における知見・方法論が見直されていく、というお話が印象的でした。

2日目午後からは、ワシントン大学の田中あずさ氏、同



図-2 Donald Sturgeon 氏による招待講演

志社大学の原田隆史氏、人文情報学研究所の永崎研宣氏、千葉大学の池田光雪氏、筑波大学の森嶋厚行氏の5名による‘The Power of Crowdsourcing and Libraries’と題する特別セッションが行われました。本セッションでは、米国と日本の図書館における進行中のクラウドソーシングプロジェクトについて講演・報告が行われました。セッションの後半は、図書館情報に関するさまざまな問題に対して、人々がどのように向き合うべきか、クラウドソーシングと図書館の可能性とはなにか、について参加者を巻き込む活気ある討議が行われました。

次回のJADH2018

JADH2018のスローガンは“Leveraging Open Data(オープンデータの活用)”です。2018年9月9日(日)から11日(火)までの3日間にわたり第18回TEIカンファレンスおよびメンバミーティング(The 18th Annual Conference and Members Meeting)と同時開催されることが決定しています⁵⁾。開催場所は東京の一橋講堂、メイン会場は2018年1月にリノベートされたばかりの一ツ橋ホールです。詳細が決まり次第メーリングリストを通じて告知します。これまでに過去のJADH年次大会にご参加いただいた方もそうでない方も、デジタル技術を人文科学分野に応用した研究教育活動の発展に興味がありましたら、ぜひともお越しください。

参考 URL (いずれも2018年2月28日にアクセス)

- 1) 日本デジタル・ヒューマニティーズ学会, <https://www.jadh.org/>
- 2) The Japanese Association for Digital Humanities 2017, <https://conf2017.jadh.org/>
- 3) Burdick, A., Drucker, J., Lunenfeld, P., Presner, T. and Schnapp, J.: Digital Humanities. MIT Press (2012), https://mitpress.mit.edu/sites/default/files/titles/content/9780262018470_Open_Access_Edition.pdf
- 4) The Alliance of Digital Humanities Organization, <https://adho.org/>
- 5) The Japanese Association for Digital Humanities 2018, <https://conf2018.jadh.org/>

(河瀬彰宏/同志社大学)